令和６年度第２回

奥州市総合教育会議

会議録

令和６年12月25日開催

奥　州　市

１　開会、閉会等に関する事項

開催日時　開会　令和６年12月25日（水）午後３時30分

　　閉会　令和６年12月25日（水）午後５時

開催場所　本庁７階委員会室

２　出席者の職及び氏名

倉　成　　淳　市長

髙　橋　　勝　教育長

髙　橋　キ　エ　委員（教育長職務代理者）

松　本　　崇　委員

菊　地　　幸　委員

佐々木　哲　也　委員

３　説明のため出席した職員

（協働まちづくり部）

千葉達也協働まちづくり部長、千葉学生涯学習スポーツ課長

（教育委員会事務局）

高橋広和教育部長、松戸昭彦教育総務課長、吉田博昭学校教育課長、菊池長学校教育課主幹、小野寺正行歴史遺産課長

事務職員出席者：千田俊輔教育総務課課長補佐

４　議題

令和７年度奥州市一般会計予算（教育関係）の検討状況について

５　協議の概要

開会、市長・教育長挨拶、議題の協議

第１　開会

高橋教育部長が開会を宣言

以降、高橋教育部長が進行、第４についてはテーマに従い倉成市長が座長となり進行

第２　市長挨拶

総合教育会議は本市教育の課題や目指す姿を共有し、一層の連携を深めながら進めていくものである。会議で調整がついた事項について、協力しながら執行に当たることを目的としている。

本日のテーマは「令和７年度奥州市一般会計予算（教育関係）の検討状況について」である。令和７年度当初予算は、「未来への希望」が持てる、人口減に負けない元気なまちづくりに資する予算を編成するため、各種計画に位置づけられた事業を確実に予算に盛り込むこととしている。地方創生の３本柱は、「まちづくり」、「仕事づくり」、「ひとづくり」だが、奥州市では、それぞれのキャッチフレーズを３偉人のイメージに重ね、「未来羅針盤」、「令和の自力更生」、「夢ストーリー」としている。「ひとづくり」のキャッチフレー

ズである「夢ストーリー」は、高野長英の著書「夢物語」から拝借したが、ストーリーが明確な夢は必ずかなう。今後は委員各位の御意見をいただきながら、令和７年度以降の予算への反映を検討したいと考えている。様々な御提言をいただきますようお願い申し上げる。

第３　教育長挨拶

本市教育の振興のためには、市長と教育委員会との連携を一層強化しながら、共通認識や課題解決の方向性を探り、教育施策を進めていく必要があると考えている。

教育委員会では、子供たちや市民が「このまちに住んでよかった」と思えるよう、あるいは将来の夢を実現できるよう、しっかりとした学びの場を提供するための取組を進めているが、本日は、委員の皆さまから様々なご意見を頂戴し、今後の教育行政にいかしてまいりたい。

第４　協議

テーマ「令和７年度奥州市一般会計予算（教育関係）の検討状況について」

事務局から資料により、テーマの説明を行った。

【協議】

倉成市長：意見をいただく前に、質問をお受けする。

菊地委員：大谷翔平選手応援事業の予算要求額の内訳を教えてほしい。

千葉生涯学習スポーツ課長：ポスター、クリアファイル等の印刷製本費、企画展の委託、パブリックビューイングの開催に係る費用、応援グッズの作成料等を要求している。

菊地委員：令和６年度予算と比較して、金額が大きい理由を教えてほしい。

千葉生涯学習スポーツ課長：今季の活躍を見ると、パブリックビューイングの開催頻度を上げる必要がある。また、横断幕の実績等に合わせて増額した。

髙橋委員：児童生徒支援相談員配置事業について、家庭訪問は別室登校の生徒を対象としたものか。

吉田学校教育課長：そのとおりで、家庭訪問の対象は不登校の子供たちである。

倉成市長：１人ずつ御意見をいただく。

髙橋委員：教育委員として学校訪問等を通して考えていることをお話ししたい。経常経費の特別支援教育経費について、学校訪問の際に特別支援学級の様子も見ている。各学校で人数に応じた教育を進めていると感じている。年々児童生徒数が減っている中でも特別支援学級の在籍数は増えている。子供たちが安心して学べる環境を作る必要がある。資料に「支援員増員による増額」とあるが、十分な支援員を配置してほしいと感じている。

特別教室へのエアコン整備事業について、学校訪問で特別教室での授業も見ているが、子供たちが気持ちよく学習に取り組むことができる環境整備が必要である。６か年で整備率100％を目指すとあるが、早急に進めてほしい。

児童生徒支援相談員配置事業について、奥州市においても不登校、別室登校の数が増えている。原因が様々で、子供たちに丁寧に対応する必要があると感じている。相談員には、より活動しやすい環境で対応してほしいと思う。不登校は中学校だけでなく、小学校の低学年から増えているので、充実した

支援員の配置をお願いしたい。

中学生体験学習事業について、海外での生活を経験したり、外国人とコミュニケーションしたりするのは、子供たちにとって貴重な経験である。実際に体験した子供たちだけでなく、他の子供たちに伝えることで、貴重な体験を全ての子供たちが共有することができるのではないかと思う。体験学習事業は、今後も継続してほしい。

菊地委員：予算編成の基本方針に、「未来への希望」が持てる、人口減に負けない元気なまちづくりとある。人口が減るのは確実で、一人一人が今以上に元気にならなければならないと思う。それができるのが、教育、生涯学習かなと思う。大谷翔平選手応援事業の目的が、応援意識の向上及び拡大、応援事業により市民の一体感及び地域愛の醸成などを図るとなっている。今、応援意識はすごく高まっていると思うが、地域愛の醸成などが市民にどのような効果があるのか。同じスポーツの事業で、きらめきマラソンやカヌーは、市民が参加することによって生涯スポーツ的な効果が分かりやすいと思った。奥州市には、大谷翔平選手というスーパースターがいるので、応援する外へのエネルギーを内側へ、まちづくり、人づくりにいかせないかと感じた。大谷選手自身も私費を投じて社会貢献に力を入れている。これをきっかけに未来への希望が持てるように持っていけないか。大谷翔平というスーパースターがいて、この場所でも努力をすれば世界に通用する人材になれるというような地元があるにもかかわらず、学校訪問で子供たちの自己肯定感が低いと言われることが多く、残念に思っていた。

佐々木委員：学習環境の整備について、夏の暑い状況が続いているので、１年でも２年でも早くエアコンを整備してほしい。子供たちは期待していると思う。

現在の先生方は、学ばなければならないことが増えている。新しい業務にできるだけ早く対応できるように、研修できる環境を整備してほしい。同時に、その時間をどう作るかも問題になると思う。研修を希望しても時間を作れるかどうかは分からないが、環境整備をしていくべきではないかと思う。学校の管理職として先生方に申し訳なかったのは、学力向上を目指してほしいというのが一番の目標だが、学力向上のために先生方が勉強する時間、授業の準備をする時間をほとんど準備してあげられなかったことである。働き方改革と併せて先生方が勉強できる環境を整備してほしい。

図書館の充実について、学校図書館、地域の図書館の両方である。先日、ある小学校に行ったら、玄関から入ってすぐの場所に図書室があり、朝から子供たちが図書室に入っていた。とても明るく、暖かい環境で、子供たちが居心地の良い図書室であった。学校の図書室は、こうあってほしいと思った。これからは図書だけでなく、様々な情報にアクセスできる情報センターの機能を持った環境も必要だと思った。市立図書館もデジタルで検索ができるようになっているし、博物館もデジタルコンテンツの整備、充実にシフトしていくと思う。

生涯学習推進事業について、指標として開講数を40に増やしたいとあるが、生涯学習や社会教育の事業の評価を何でするのか、毎年苦心していた。講座

の開設数や参加者数でしか示せない。講座に参加して、どれだけ成果が得られたかを数値で示す方法がないことが課題となっている。大学の先生方も研究を進めているが、これだというものを出せない状況である。講座数を指標にすることは悪いことではないが、全国的な流れとして行政が講座を開設しないという市町村が増えている。大都会では、市民が自分でグループを作って勉強会をして学習を進めている。行政が、それをやりやすいように手伝うことにシフトしている市町村が増えている。岩手県では、そのような市町村は少ない。いろんな学習グループが学習したいと思ったときに、スムーズにできるのか。場所をどうする、学習資料をどうする、経費どうする、そういういくつかの課題をどうやって乗り越えていくのか。行政として、それらをいくらかお手伝いしてあげればいいと思う。できれば、学習資料を準備するときに、輪転機を使っていいですよとか、コピー機を使っていいですよとか、そういうサービスがあってもいいのかなと思う。それから、情報交換ができるスペースの人気がある。私たちのグループは、こんなことをやっていますという場を作り、そこで情報交換をして時には合流して勉強をする取組をしている所も増えているように思う。市民の学習環境を整備したり、学習の手伝いをしたりという施策も今後はあってもいいと思う。

倉成市長：学校に入ってすぐに快適な図書室があるのは、県内の学校か。

佐々木委員：県内である。

倉成市長：奥州市以外か。

佐々木委員：残念ながら奥州市ではない。今、新しい学校を作るときにそこを大切にする。昔は、一番上の一番奥の配置が多かった。今は、子供たちが常に行き来できる交差点のようになっている。胆沢中学校もそうである。

松本委員：夢を持っている子が少ないと思う。夢を見させる教育が果たしてどうなのか。中高連携事業が大事だと思う。高校を選ぶとき、学力でしか選んでないというのが現実だと思う。自分の学力で行ける所を探ると、そこになるということが結構多い。夢に触れる機会を作れる授業はないものかと思っている。ゲストを呼んで話を聴くということを中学校でもやられているが、その回数を増やすなど夢を見る場所が近い所にあるのではないかというのをもっとやった方がいいのではないか。大谷選手は、夢として描くには大きすぎる。80億分の１になるのは難しいので、もっと身近な所に目を向ける教育ができたらと思う。そのために、学力以外の授業時間を確保するためにもICT支援等でもう少し授業を効率化する。そのためにパソコンやタブレットを導入しているはずなのに、それを使うために汲々となっていることがすごくもったいないと思っている。そこを強化してほしい。この授業が何の役に立つのかということを伝える授業の時間を作ってあげたい。うちの息子があまり夢を見ないタイプなのかもしれないが、友達がこんな職業に就きたくて頑張っているという話も聞いたことがない。家でYouTubeなどを見ていても興味のあるものしか来ない状況になっているというのが今の広告戦略である。見たものと興味のあるものが集中するようになる。いろいろな情報が一杯入ってくるのは学校になるのではと思い、それに予算をかけられればと思っている。小中高と夢を見続けるというのは大変である。小学校から同じ夢を見続ける

子もいれば、小中高といろいろな夢に触れ、選べるというのも大事ではないか。学校が夢の見つかる場所になるように力を注げていければいいと思う。

倉成市長：学習環境について、１つはエアコン等物理的な話と、もう１つは特別支援学級の子を取り残さないような学習環境の話が出た。物理的な環境の話は、早めに予算を集めて一気に進めればいいのではないかということだが、それは、段階的に進めないと厳しい。０か100かという形じゃないやり方もあるのではないかと思っている。特別教室にいる先生は非常にしんどい環境にいる。特別教室全体に対応するエアコンだとキュービクルの整備等でとても経費がかかるので、一時的に先生がいるエリアだけでもある程度過ごせるような形にするなど工夫すべきである。順番に整備しても、最後の学校は７年、８年かかり、どういう順番にするかなどいろいろな問題が出てくる。

北上市の洋式化率は77％で、奥州市は58％である。77％を追うのではなく、一周遅れのトップランナーを目指すべきではなか。最近は、洋式トイレでもやらない小学生がいる。ウオッシュレットでないと使わないという子供がいる。今後10年間は、そういう子がどんどん増える。洋式化しても、壊してウオッシュレットにするなどの対応が必要になる。上に乗せるだけでも機種が限定される。それであれば、１フロアに１個でも２個でもいいからウオッシュレットを入れた方がいいのではないか。使える形の方がいいのではないかと提案している。洋式化率58％のままで、ウオッシュレットを10％にした方が使う人が増えるのではないかという意見である。総合計画で計画してもいいが、世の中は変わっている。ウオッシュレットでないと使えない小学生がどんどん増えると思うし、衛生環境を考えてもあった方がいい。学校でエアコン、トイレのほかに物理的環境を整備すべきする所はあるか。水道で困っている所はないか。

髙橋教育長：そういうことは聞かない。

松本委員：水沢中学校の水がまずいという話を聞くことがある。学校の水がおいしくないから飲まない。家から水筒に水を入れて持って行くが、なくなり、５時間目にのどが渇いたという話を聞く。熱中症の心配がある。

松戸教育総務課長：新築すれば管が新しくなるので、改善される。

千葉協働まちづくり部長：合併当時、胆沢の校舎が古く、赤水、黒水問題があった。このままでは飲めないということで、高圧洗浄でいくらか透明な水になったが、抜本的な解決にはならず、校舎を改修し地震にも強く、管も昔の鉄の配水管でないものにしている。新しい校舎は良くなっていると思うが、老朽化した校舎は水が家とは違いすぎるので、水筒を持たせている。赤水、黒水問題のときは、水質検査もした。飲料水としての基準はクリアしているが、さび臭い、出してすぐはオレンジジュースのような色で、何分かすると透明になるということがあった。

松戸教育総務課長：羽田小学校で、少し飲みにくいことがあったため、浄水器を設置している。

倉成市長：トイレの洋式化77％を追わないという案はどうか。

菊地委員：ウオッシュレットがないと使わない子は、そんなにたくさんいるのか。

倉成市長：増えているのは確かだと思う。例えば買物の施設などでウオッシュレットのない所へは行かないという子が増えている。ショッピングモールは必ず入れている。そうでないと客が来ない。全部洋式化しても使用率が上がらないと代える意味がない。和式とウオッシュレットの組合せの方がまだまともではないか。将来のことを考えると、快適にした方が良い。

髙橋委員：学校で教職員や来客用のトイレを使うと、洋式が１つもない学校がある。先生方も大変だろうなと思う。

倉成市長：物理的な環境については予算が関係するものなので、要望があるということで進める。多様性に対応する学習環境について、根本的に他と比べて劣っていると感じることがあれば意見をお願いする。先ほどの夢の話は、組織で対応するというよりも質の話か。

松本委員：授業のカリキュラムがなく、例えばクラスを３分割にし、今年は大工を目指すとして自分たちで何が必要かを考えるというやり方をしている学校がある。それが面白いと思ったが、基本的な学力は付かなかったり、偏った学力になったりすると思う。根本的なという意味では、多様な教育が求められているが、学校以外の選択肢がない。フリースクールや学校以外で単位が認められるものがない。受け皿が学校しかないので、学校に新しい教室を増やすしかない。新しい学校に行った子もいろんな子がいて、細分化すればするほど市としてやる教育が限界になる。ある程度の学校方針を定めないと学校の運営ができないというのも分かるが、そこから外れた子供たちを学校として囲うのにも限界がある。別な環境に委ねることを考えるのも大事だと思う。

倉成市長：教育機会をちゃんと確保しなければならないが、全部を学校がやる必要なないのではないかということか。

松本委員：学校だけでは無理なのではないか。どうしても学校が嫌な人は、子ではなく親の方が増えている。自分の子が４年生まで支援学級で、５年生から通常学級に戻ったが、通常学級にも個性豊かな子が多いという気がしている。個性豊かな子が馴染める教室にもなっていると感じる。そういう子の親を見ると、本来は支援が必要な子だが、親としては通常学級に入れたいということで通常学級に入っている。子供たち同士でも多様性が認められているという印象を受けた。変わった子もいじめられることはなく、変わっているからいじめられるということではないと思った。そういう意味で、良い状況になってきていると感じた。その中で、どうしても学校に馴染めない子の受け皿を作る必要がある。

倉成市長：そのサポート体制等で何かコメントはないか。幅広く１つのクラスに入れると、サポートが大変だと思う。

吉田学校教育課長：様々な支援を必要とする子が増えているのは、そのとおりである。教育委員会としては、まず学校の中でその子に合った居場所をと考えているので、不登校に関しては特に中学校で児童生徒支援相談員をその学校で組織的にいかしながら別室登校の対応をその子に合った形でできるように、去年まで配置されていなかった衣川中学校に今年は児童生徒支援相談員を配置した。中学校は、空きコマのある先生が別室登校の子に対応するが、

小学校は学級担任制なので、誰が対応するかというと１番は保健室の先生になる。２番目は担任を持っていない先生となるが、担任を持っていない先生は、休んだ先生の学級に入らなければならない。小学校で別室登校の児童がいると、現実的には保健室の対応となるが、保健室は体の具合が悪い子が来る所なので、そういう子ばかりを見るわけにはいかない。今まで不登校というと中学校に児童生徒支援相談員を配置していたが、このような事情から、小学校にも必要だろうということで増やした。居場所を教室でない所にも学校に作るということは、人員を増やしながらやっていく。学校以外では、教育委員会ではフロンティア奥州を開設しており、今年は江刺にも開設している。水沢と江刺を合わせて昨年度以上の児童生徒が通っており、今は水沢より江刺の方が多い。２か所を見学して旧岩谷堂幼稚園の環境が良いとする保護者が多いようだ。どちらかというと、小学生は江刺の方に通うような感じになっている。その子に合った居場所を作ることが大事だと思う。そのせいか分からないが、現在の不登校の児童生徒は、昨年度と同じくらいの数で止まっているので、年々増加していたのがこれ以上増えないのかなという感じである。

倉成市長：いろいろ手を打っている。親が変わってきていて、不登校の定義が昔とかなり違っていると思う。行かなくていいと言う親が出始めており、対応をどうするかという問題がある。いわゆる不登校の対応としては、幅広く手を打っているという現状である。

髙橋教育長：教育機会確保法の関係で文部科学省からの通知の中身を拡大解釈された部分がある。学校は必ず登校させなければならないわけではないという部分だけを強調して捉えられた。後で文部科学省が、復帰させることを目指すことは悪ではない旨、修正の通知を出した。復帰させることを目指すことは悪だという論調になっていたが、それは違うと。戻す準備ができたら戻していいが、どうしても馴染めない、学校に合わない子が一定数いると思う。教室に入れない子は別室で対応するし、学校には行けないがフロンティアには行ける子がいる。フロンティアにも行けない子がごく少数いるが、ほぼ家庭にとどまっている子だと思う。それほど多くはないが、そういう子が行ける場が必要な場合もあり、フリースクールのような所だと思う。文部科学省でも新たに追加し、安易にそういう所へ行くと不利益も被るということも言っている。当然、学校ではないので、成績もつけづらいし、いろんな体験も不足し、そこだけに依存すると将来的に資質、能力も育たず、最終的に学力も付かないことになるので、その補償はどうするか。学校と切り離されていると、学校からのサポートはできなくなり、それは避けなければならない。学校とつながってフリースクールに行っているのであれば、いろんな学習支援を継続できる。積極的に学校と断絶する方もいるようなので、それはどうなのかなと思う。

倉成市長：ストーリーが明確な夢は必ずとは言わないが、叶う。大谷選手の曼荼羅チャートがそうである。最初は「プロ野球選手になりたい」でもいいが、そこからちゃんと組み立てられるかというのが教育の力だと思う。具体的な目標に落とし込む。大谷選手の場合は高校で具体的な目標を落とし込んで、

それをいまだにやっている。東北人は粘り強いと言われるが、とてもいい特質だと思う。大谷選手を例に挙げると、謙虚である。俺が俺がという人は少なく、しっかりとやり抜く。これは、今の世の中に求められている特質だと思う。そういうところに自信を持って、子供たちが夢を持って実現に向かう支援をしなければいけない。パリオリンピックを見ても、急に世界の舞台で活躍する選手がいる。よく見ると若い頃から海外へ行っている。今まで１人ではなかなか海外へ行けなかったが、今は支援会社がしっかりしている。フィギュアスケートがそうである。IMGという支援会社があり、社長は江刺の出身である。気軽に行ける、すぐに試合に出られる環境を整えてあげたから活躍できたと思う。行政がやることは環境を整えること。今回のオーストラリアへの体験事業など、全員は無理だが手を挙げた人に機会を与えることは重要である。あとは、自分でストーリーを作る。今までの勉強は、いい高校へ行って、いい大学へ行くという点で進路を決めていた。AIの時代は、それが全く意味がなくなる可能性がある。それを腹に入れた教育が必要だと思う。どういう教育が必要かというと、問題を解決できる人。今、企業ではどういう人を採っているかというと、点数や出身大学は見ない。こういう問題をあなたならどうやって解決しますかという課題に対し、ちゃんとやれる人を採る。社会の求める人物像はどんどん変わってきている。中高一貫教育の学校をこれから作ろうとしても意味がない。例えば、八幡平市のハロウスクールのようにダンスをやるとか、課題を見つけてそれを解決するとか、地域でアドバンテージのある教育の仕方があると思う。それに注目することによって、夢を持つ人がもっと現れるかもしれない。そういう時代になってきたと思う。夢を持たせることは重要である。

図書館の話は面白いと思った。現在、まちづくりの中で図書館を重視している市が多い。図書館に人を集める力があることが見えてきたので、町のど真ん中に図書館を作る市が増えている。姉妹都市の掛川市もそういう図書館を作っている。和歌山の図書館は幼児用のものしかないフロアがあるなど、目的をもって図書館を作っている。これからの時代、戦略的に図書館を作ることが必要かもしれない。奥州市は読書率が高い。その伝統を守った方が良い。

髙橋教育長：読み聞かせが定着しているので、読書率は他の市町村と比べてかなり高い。

倉成市長：学校だけではなく、休日に親が連れて行き気軽に入れる場所があれば、活用すると思う。まちづくりと学校教育とを合わせた形のやり方が戦略的に必要だと感じる。子供たちが行って読みたくなる工夫がほしい。

佐々木委員：県立図書館を作るときに、いろんな場所を視察し、都内の図書館の熱の入れ方が違うと感じた。区内の全家庭から歩いて15分以内のところに借りられる、返せるアクセスポイントがある。そこは、日本一の貸出率であった。努力をすれば住民も借りてくれる。紙ベースの本とデジタルコンテンツとをどういうバランスで使っていくのか。紙も残ると思うが、紙でできないがデジタルでできるものがある。

倉成市長：媒体の違いもあるが、デジタルだと塾の少ない所でもICTでできる。

数学や英語は一度分からなくなると、そこからやらなくなる子がいる。それを防げれば、全体的に学力が上がる。媒体としての違いと時間の使い方を１日の中でどう組み立てるかは、個人差が出ると思う。

佐々木委員：子供のうちは、本に親しむことが大事だと思う。

倉成市長：親が読み聞かせている子は、読むので、親の責任もあると思う。

松本委員：YouTubeを見ていると同じものしか見なくなる。デジタルコンテンツは自分が見たものしか集中して見られなくなる。図書館だといろんな本があり、息子を連れて行くと、そんなものに興味があったんだと思うことがある。なぜそれを借りたのかを聞くと、なんか面白そうだったと答えた。「なんか面白そうだった」が散りばめられているのがいい。自分が好きなものだけに集中できない環境にデジタルでないもので触れさせることがいいと思う。

倉成市長：そういうメリットがあるかもしれない。

松本委員：それで興味を持ったものを深堀できるのがネットの良さである。子供たちの１日にかけている時間のほとんどがデジタルに絡んでいる。一歩先を行って、図書館整備に力を入れてほしい。

倉成市長：無駄な投資がないよう、世の中の動きをしっかり捉えて予算化していく。人と人とが直接触れ合う機会は教育効果がある。そういう機会をいかにして作っていくかが行政の課題だと思う。まちづくりは、官民連携という形でやっていく。教育もそういう面があり、定年退職した職員の力をどうやって借りるか。そのつなぎ役を行政がやる。行政の支援の仕方は、ずいぶん変わってくるだろうと思う。そういうことを前提として、これからも予算編成をしていきたい。

第５　その他　なし

６　閉会